新春随想

祖父の聖書
小樽市医師会　西　信博…12

ワインの買い付け（素人編）
札幌市医師会　三浦貴子…13

余生63年
札幌市医師会　小竹英夫…14

祖母の思い出の言葉
函館市医師会　小野寺隆一…15

戌年の初に思う
札幌医科大学医師会　髙橋長雄…16

安全性
札幌市医師会　中川宗一…17

昭和33年という年について（昭和33年に生まれて）
札幌市医師会　水上明保…18

がんばれヤンキース
札幌市医師会　佐藤智子…20

ヨーロッパ眼科学会ーベルリンへの旅
札幌市医師会　今泉寛子…21

戌、犬、イヌ
札幌市医師会　原田幸二…22

早寝、早起き、腹八分目、そして禁煙
函館市医師会　青野　允…23

新年早々失礼します。
留萌市医師会　川田佳克…24

年金の話
札幌市医師会　大月國司…25

臥牛の山は低くして
函館市医師会　尾崎鉄也…26

シャイロックより悪いやつ
十勝医師会　中村隆志…27

若州一滴文庫
滝川市医師会　武内恵輔…28

エレガントな死について
帯広市医師会　髙橋　徹…29

最北の地にて
宗谷医師会　佐藤祐一…30

（順不同・敬称略）

祖父の聖書

小樽市医師会
西病院　西　信博

私の母方の祖父・平塚直治（1873～1946）は、札幌農学校で宮部金吾先生のもとで、植物病理学を学び、明治29年に卒業しました。一時教職についたあと、帝国製麻株式会社の技術重役として活躍しました。敬虔なクリスチャンで札幌北光教会の長老でした。祖父は60年前の昭和21年、丙戌になくなりました。私は当時12歳の年男でした。

祖父の遺品の中に、11.2×14.5㎝、200ページの聖書がありました。これは1873年に、NEW YORKのAMERICAN BIBLE SOCIETYで出版された英和対訳聖書で、133年前の発行です。

左ページは「SHIN-YAKU SEISHO YOHANNE NO FUKU-IN」、右ページは「THE GOSPEL· SAINT JOHN」と印刷され、英文のジョンが和文ではヨハネになっています。

ヘボン式のローマ字を用いた、和文の書き出しは「Hajime ni Kotoba ari, Kotoba wa Kami to-tomo ni ari, Kotoba ha Kami nari」で、英文は「In the beginning was the Word, and the Word was with God」です。和文を仮名まじり文になおすと以下のようです。

「はじめに言葉あり、言葉は神とともにあり、言葉は神なり。この言葉ははじめに神とともにあり。よろずのものこれにて成れり；成りしものはこれにあらで、ひとつとして成りしものはなし。これに命あり；命は人の光なりし。光は暗きに照り；暗きはこれを悟らざりし。神につかわされてヨハネという者あり。彼は証拠のため、光について証拠をたて、皆彼によって信ずるためにきたれり。彼はその光にあらず、ただ光について証拠をたつるために来たれり。世間にきたりてもろもろの人を照らすものは、まことの光なり。」

ヘボンの愛称で親しまれた医師・ジェームス・カーチス・ヘップバーン先生（1815～1911）は、1859年宣教師として来日し、布教活動のかたわら、多くの日本人の弟子を育てました。横浜に施療所を開き、白内障や脱疽の手術を行い、名医として尊敬されました。

彼は1867年伝道のために、独力で「和英語林集成」を出版し、ヘボン式のローマ字表記を発明しました。この辞書は日本語をローマ字と片仮名と漢字で記しており、日本語を学ぼうとする外国人にも、英語を学ぼうとする日本人にも、最大の助けになりました。

一部10円という破格の高価でしたが、飛ぶように売れました。1872年には、増補改訂を加えた第２版を出版し、聖書とともに、明治天皇に献上しています。さらに多くの翻訳活動を続け、1872年には「馬可（マルコ）伝福音書」「約翰（ヨハネ）伝福音書」、その後新約聖書翻訳出版、旧約聖書翻訳出版を行い、1892年アメリカに帰りました。

祖父の遺品の対訳聖書は「これよりほかにイエスのなされしこと多くあり；もしこれをいちいち記されなば、記されたるふみは、この世間にだにも載せつくすことあたわじとぞ思う。アーメン」で終わっています。アメリカで出版された、この対訳聖書にヘボンがかかわっていたかはわかりません。きっとヘボンをはじめ、多くの日米のクリスチャンたちの原稿が太平洋を往来し、推敲を重ねたものでしょう。キリシタン禁制の幕末から明治にかけての、キリスト教宣教師のエネルギーや

本会では、例年新年号に「新春随想」を企画し、年男・年女に当たられます会員諸氏より無作為に選定させていただき、執筆をご依頼申しあげております。

時節がら、ご多忙にも関わらず、ご寄稿いただき感謝申しあげます。

なお、年男・年女に当たられます会員は678名でありました。

◇情報広報部◇

使命感の強さが感じられます。

なおヘボン先生については、眼科医・小田泰子先生（北大医学部、昭和34年卒）のご教示をいただきました。

ワインの買い付け（素人編）

札幌市医師会
三浦俊祐・貴子皮膚科　三浦　貴子

これは、まったくの素人のお話です。ワインに詳しい諸先輩が大勢いらっしゃる中で、この題材は少し勇気がいりますが。我が家は夫婦二人でワイン好きです。さかのぼれば、十数年前からでしょうか、家から歩いて２～300ｍ位の所に小さなイタリアレストランがありました。私たちより少し年輩のシェフとその奥さんの二人でやっていました。近くて行き易いので、時々食べに出かけていました。何度か行くうちに、シェフと少し会話をするようになり、ワインを勧めてもらうようになりました。最初に名前を覚えたのが、キャンティークラシコ・リゼルバでした。これは飲み易くてとても気に入り、デパート等で自分でも買うようになりました。しかし、値段の手頃な知らないワインを買うと、当たり外れが大きく、自分でも少し覚えて、おいしいワインを買えるようになりたいと思うようになっていきました。

ちょうどその頃に、あるルートから手に入った（秘密です）1980年代（正確な年は覚えていません）のシャトー・ラトゥールという赤ワインを飲む機会がありました。うわーっ、すごい！という感じでした。その味は１週間程、鼻のあたりに残っていました。言葉で表現せよと言われても困るのですが（ワインを表現する言葉は色々とあるようです。フルーティーな、スパイシーな、等のわかり易いものから、火打石、濡れ犬、等という妙なものまで）。そのワインがとてもおいしく、印象的だったので、以後少しだけワインの本を読んだりしましたが、続きませんでした。実はそのワインの名前も、後から本でラベルを見て、わかったのでした。今にして思えば、フランスのボルドーの５大シャトーの一つでした。

そんな頃に今度はあるワイン商から、ワインの試飲会の案内が来ました。職場から近かったので、土曜の診療の帰りに立ち寄ってみました。初めて行くので少し緊張しましたが、色々試飲をさせてもらい、自分でおいしいと思ったものを選んでいくうちに、お手頃の値段のワインを１ダースほど買ってしまいました。色々教えてもらいながら試飲をして、自分でも少し覚えたワインの味を確認することができました。面白くて１時間程いたように思います。以後、年に２回春と秋に案内が来るので、必ず行きます。

こうして７～８年がたちました。今はすっかり顔なじみになり、行くと決まって、白の軽いものから赤の重たいものまで、順番に試飲させてもらいます。20本ほど試飲して、何が何だかわからなくなります。毎回同じ定番のものを試飲し、新しいものと比べたり、例えば、スーパートスカーナだけを何本か試飲したりします。前々回に行った時のことです。ある女性が話しかけてきました。店員と間違えたようです。すかさず、エプロンをした本物の店員が、こちらを指して「この人は買い付けに来てるんですよ」と冗談半分に言うのでした。するとその女性は「そうだったんですか、大変ですねー」と本気にしてくれたようで（？）、私は結構気を良くしてしまいました。

それ以来、すっかり気分は買い付けです。ワインに詳しいわけでは全然ないのですが、こうしていつの間にか、我が家でもそれなりに、おいしいワインが飲めるようになりました。前年度の買い付けも無事終わり、また新しい年をワインと供に迎えることができ、ありがたいことです。

余生63年

札幌市医師会　小竹　英夫

今年は戌年である。明治43年（1910）生まれの小生にとっては、年男ということになる。数え年で97歳になるらしい。いつの間にこんな年になったのかと、いぶかしい気持ちである。特にこれという養生法をしているのでもないのにである。自分でも長命と思い（大学の同期生はひとりもいない）、他人からもそう思われているのだろう。

しかし、実はもうこれで我が生涯も一巻の終りかと思ったことがあるのである。それはいつ、どこでと問われるだろう。

それは昭和18年（1943）のことである。5月12日我が軍が占領していた、米領のアリューシャン列島のアッツ島に、米軍が上陸してきたときのことだ。

アッツ島は、近くのキスカ島と共に、我が軍が前年の17年の6月に、無血上陸していたのである。

米軍のアッツ上陸に驚いた日本陸軍は、急遽第7師団に動員下令し、救援のための派兵を決定した。

5月17日、小生は臨時召集によって、歩兵第26聯隊に応召、第7師団第1野戦病院に編入された。病院長は、北大医学部第12期の小原徳行君であった。同期の林　延夫君（元札幌市医師会長の林　武夫君の令兄）や、元北大薬理学教授の田辺恒義君もいた。

それから毎日、上陸作戦の訓練の明け暮れであった。

天幕建設などやらされたが、碌にでき上がらないのだったが、逆上陸ができたら、早速天幕を設営して野戦病院を開設することになる筈だった。

アッツの戦況が、いかになっているかは、下級将校である我々には、一切知らされなかった。

しかし、アッツ島奪還のための動員である以上、われわれがアリューシャンの海域に送られるのは必至であった。

制海権も制空権もないからこそ、敵に上陸を許したのは明らかで、そこにノコノコと、船足のおそい輸送船で行ったときに、どういう事態になるか、これはいわずと知れたことである。

敵の飛行機や潜水艦がウヨウヨしている海上を、どうやって突破して行けるのか。もちろん、駆逐艦などの護送艦がつく訳だが、どうやら海上戦力の差は、前年のミッドウェイ海戦で明らかであったのであろう。

それでも小樽からの乗船ということがはっきりし、乗船区分も達せられた。

もうこれで、我が一生も終わりと思わないではいられなくなった。北方の冷たい海中に投げ出されたら、かりに負傷していないとしても、何分間生存できたろう。

敵の空爆や、魚雷攻撃を受けたとき、それを防ぐ手段が、我が軍にあるとは思えなかった。

幸いにして、さすが頑迷な参謀本部も、この作戦が、いたずらな兵員・資材・食糧の海没・損耗につながるとみてとって、作戦の中止を指令したのであった。

このとき小生は、我が生も三十余歳で終るものと覚悟したのである。従って残ったその後の人生は、余生と称してはばからない。

いまとなっては、前半より余生の方が、はるかに長くなった。

結局、アッツ島守備隊陸海軍合計2,500人は、救援もなく見捨てられ、我国初の玉砕を遂げたのである。

一方、キスカ島の方は、濃霧を利用して、奇跡的に救出に成功したが、そのための海軍の苦心たるや並大抵ではなかったことは、『戦場の将器　木村昌福』（生出　寿著　光文社）に詳しい。木村は救出水雷戦隊の司令官であった。救出は18年7月29日で、陸海軍将卒5,200人は、一兵も損せず

撤収できた。

小生の同期の赤倉克巳君（現道医副会長・赤倉昌巳君の父君）も、九死に一生を得て生還した。

小生の軍歴は、このアッツ救援作戦のみでなく、実に6度も営門を入ったり出たりの青春である。

昭和10.1.20　現役兵として歩兵第27聯隊入営。**11.1.19**　衛生部甲種幹部候補生として退営。

12.7.1　幹部候補生召集により、歩兵第28聯隊に応召、**7.30**　退営。

12.11.8　臨時召集により、歩兵第28聯隊に応召。碇泊場司令部員として、中支那にて軍務に従う。**16.6.7**　騎兵第55聯隊（善通寺）にて召集解除。

16.7.30　またまた臨時召集を受け、樺太上敷香陸軍病院に服務。**17.8.31**　召集解除。

通算合計、ほぼ6年、6度のあわただしい青春であった。この間、碌なものを食べなかったのに、よくもこの年まで生き延びたものと思う。

祖母の思い出の言葉

函館市医師会
市立函館保健所　小野寺　隆一

今年は戊年で48歳、年男である。年男の年には、いつも亡き母方の祖母の言葉が思い出される。祖母は新潟の旧家の出で、そのせいか神事や仏事も大事にしていた。そのため私も幼い時から、祖母からよく迷信を聞かされて育った。

その中の一つの言葉である。年男、年女になった年は1年間よく活躍すると言われているが、実際は12年に一度の運の悪い年である。この年はいろいろな物事が一度に重なってくる。社会的な物事は一生懸命仕事を行う。個人的な物事に関しては、運の悪い年なのだから新しいことを行なうことはできるだけ避ける。こういう年は気分もイライラしてくるので、いつもより慎重に考えて行動する。そして注意する時期は、年男、年女になった前の年の6月過ぎから注意して年男、年女の年の6月位までは一番注意しなければならない。その後は注意しながら次の年の節分まで待つ。節分で運の悪い時期が終わる。

これが祖母の残した年男、年女についての言葉の一つである。迷信ではあるが幼い頃からそのような事柄を多く聞かされてきた私にとっては、強く印象に残っており、また自戒の言葉ともなっている。

年男になるたびに、今年はしっかりと仕事をしようと思ってきて実際頑張ってきたつもりであるが、今までこれはという成果が上がったことはない。とにかく年齢的にも、祖母の言葉でも今年はいつも以上にしっかりと仕事をしていけたらと考えている。個人的な事柄は、平穏な年であることを願っている。何か小さなことでも一つ仕上げられたらと思う。

年男、年女の年はすごく活躍する良い年とするのが一般的と考えられるが、どこか自制も必要と思うので私にとっては上に掲げたように祖母の言葉が戒めになっている。

今年の戊年が社会的にも、経済的にも、また個人的にも良い年であることを願う。医療を取り巻く情勢が厳しさを増す中、本年が、会員の皆様にとって幸の多い良い年でありますように、また一会員として心から願っております。

戌年の初に思う

札幌医科大学医師会
札幌コスモクリニック　髙橋　長雄

大正11年生れの私は平成18年えと（干支）戌で７回目の戌年を迎える。お前の生れ歳は戌年だと繰返し言われて育ったせいか、小さい子供の頃から犬に対して、たしかな近親感を持ち続けている。私の生れ育った生家は小樽市の街の中心部に近い花園町にあった。ここは大小の商店が数多く集まり、さらに多くの住宅がその間にひしめいて、もう詰めこめないと悲鳴をあげそうなほど密集していた。その極端な密集地域の中の、わが家の近くに、急に気が抜けたように一辺がそれぞれ二丁ほどの四角形の大きな空地があり、花園小公園とよばれていた。花園町の町内には、さほど遠くないところに市営の正式な花園公園がある。こちらは、小学校の全校生徒の運動会やプロクラスの野球団の正式な試合が悠々とできるほどの広いグランドや大きな噴水池、小樽港を一望できる展望台地など、他都市の正式な公園に比肩できる良い公園であるが、前述の花園小公園は四周の道路との間に境界を示す柵も全く無く、雑然とした広場であった。それでも一応繁華街のど真中にある広場なので、夏祭りの時期などには全国巡業している一流のサーカスなどいろいろな見せ物が廻ってきて、どでかい大テント幕舎を作り、一度に二、三百人の観客を集め、終日楽隊が大音響をあげたりしていた。

この空地は、このように年に１～２回利用される以外は、廃用になった家屋を壊して集った建築廃材が乱雑に山積みにされていたり、市内の現場で作業している土建業者が、勝手に道具や建材を漫然と放置しておいたり、さらに当時周辺近所にあった食品加工工場の廃棄物がドロドロに腐って悪臭を放っていたりした。このような古材の積み重ねた所が、雨露を凌ぐ囲いのような形になると、捨てられた犬や猫が、自分で、うまい具合に見つけて住みつくのか、仔を産んだ親ごと飼主が捨てたのか、横に寝た親が数匹の仔に哺乳しているかわいい姿を見れることがあった。

話は変わるが、昭和20年夏、朝鮮釜山の高射砲聯隊の隊付軍医として終戦を迎え、間もなく帰郷した私は、入隊前に大学院特別研究生として選考に合格し、指名されていた北大医学部の薬理学講座に入局した。当時も現在もそうであるが、医学研究のための動物実験には家兎がよく使われていたが、終戦後間もなくの時代は、著しい物資不足の影響をうけて、家兎そのものが入手困難であったばかりでなく、緑草、野菜などの餌や飼育のための用具、飼育のための人手など、ことごとく欠乏状態で、各教室の動物飼育室は何処もガラガラの空室だらけだった。旧北大医学部基礎校舎の中の薬理学棟の隣組には法医学や生理学第一教室があり、それぞれに附設された実験動物室からは、収容された犬の吠える声が、やかましく聞こえた。その時は、犬なら兎と違って自分の食欲を我慢しさえすれば、食事をわけてやれて都合が良いなどと羨望する気持ちは全くなかった。ところが動物実験による研究が始まり、学会での成果を競い合う討論など始まってみると状況は一変する。実験によるデータが得られないことには、自分を取巻く状況は一歩も前に進めないのである。国内外の他の大学研究室から報ぜられる成果は、こちらの構築した理論を刺激して、虹のように、夢のようにアイデアの花を咲かせてくれるが、自分が実際に動物実験に手を染めて、自分の手でデータを得、それによって構築した理論の骨組を実際に、揺り動かして見たり、さらにデータをえて骨組を叩いてみることなしには、実際に一歩も半歩も動けない。こんな時“若気の至り”で阿修羅の形相もものすごく、キモグラフィオン上の煤紙を睨みながら一夜を明かした日を思い出した。それでもとうとう最後まで犬を実験動物に使うことはなかった。

新　春　随　想

安全性

札幌市医師会
中川胃腸科クリニック　中川　宗一

新年あけましておめでとうございます。本年も宜しく御願い申し上げます。

新年にあたり、いろいろ考えることがありますが、今回は現代社会で重要視されている安全性について考えてみました。

私は飛行機が好きで、暇なときに航空機の本を時々読むことがありますが、航空業界は、安全性に対する認識が非常に高く、医療業界とは比べものにならないくらい、安全に対する細かい規定が存在します。特に勤務時間については、きちんと決められており、何時間飛行したら何時間休む、飛行の何時間前からお酒を飲んではいけないなど、細かく決められています。

以前、私の大学時代の同級生の外科医が、国際線の客室乗務員と結婚した際、友人代表の話を私に頼んだことがありました。その時、友人は私に、話の中に、「当直が終わった次の日も普通に仕事があり、遅くなることも当たり前だ」という内容を盛り込んでくれないか？と要望がありました。私は、最初何のことかよくわかりませんでしたが、友人に聞いてみると、人の命を預かる重要な仕事なのに、眠らないで何十時間も仕事をしているのは信じられない、実はどっかで遊んでいるのでは？と疑われたそうです。彼女にしてみれば、航空業界の常識と同じように、医療業界も安全性のために勤務時間もきちんと規定されていると思ったに違いありません。私たちの常識では、状態の悪い患者さんがいれば、眠らないで診療し、次の日は普通に外来、検査、手術とこなしていくのが普通だと思っていましたし、疑問に思うこともありませんでした。その友人は、今のところ離婚もせず、幸せな夫婦生活を送っているところをみると、奥さんは医療業界の常識を理解してくれたようで、私の話が役立ったのかなと……今度友人に聞いてみようと思っています。

現在、全国から医療事故、医療ミスなどが多数報告されていることも、このような無理な勤務時間も影響しているのではないかといわれています。今回このような話から、そろそろ医療界もきちんとした勤務規定や勤務態勢を決める必要が求められる時期が来るのではと思いました。以前は「医者は体力」「眠らないのも仕事のうち」などと後輩に話していましたが、最近では睡眠も仕事のうちかと考えるようになり、医者の集中力、健康保持もリスク回避の重要なポイントであろうと思いました。

今年も、医療界に事故、ミスが無いことを祈念して、私の文章を終わらせていただきます。今年も宜しく御願い申し上げます。

新春随想

昭和33年という年について（昭和33年に生まれて）

札幌市医師会
伏古レディースクリニック　水上　明保

私は昭和33年生まれの戌年で、今年年男です。

一昨年位から昭和30年代ブームとなり、昭和30年代をイメージしたテーマ・フードパーク等が人気を集めています（その一番手は札幌駅前のエスタにある札幌ラーメン共和国です）。また昨年末には、ビックコミックに30年以上連載されている西岸良平の漫画をモチーフとした「ＡＬＷＡＹＳ、３丁目の夕焼け」という昭和33年という年をテーマにした映画が封切られて人気を呼んでいます。もちろん当時のことは何も覚えていません。自分が誕生した年ということもあり、ちょっと調べてみるとこの年はいろいろなものが世の中に登場したり、出来事があってとても興味深い。そこで今年は戌年ということもあり「セピア色の想い出」にしてはまったく記憶がないですが、自分と「同い年」のものたちを列挙して紹介してみます。

―― 時代背景 ――

まず昭和33年という時代背景ですが、岩戸景気が始まった年で、たとえば物価は物の本によるとこんな値段でした。

封書10円、はがき５円、バス代15円、ふろ代16円、理髪料金150円、大卒の初任給１万3,467円。（今の価格の１／10～20位でしょうか）

―― ミッチーブーム ――

テレビはまだまだ高嶺の花でこの年、ようやく日本全国で100万台を突破し、その普及率は10.4％だったそうです。当時最大の関心事は「ミッチーブーム」と呼ばれるもので、民間から出た正田美智子さんと現天皇とのご婚約が11月27日に発表されました。当時は提灯行列が何度も出るほどの大騒ぎだったそうです。その47年後の昨年、美智子妃殿下の内親王の清子さんが民間の黒田家に嫁がれたのですから時代の流れを感じずにはいられません。

ブームといえば、「ロカビリーブーム」「栃若ブーム」「力道山ブーム」なども昭和33年が絶頂期だったようです。さらにこの頃、現：林家正蔵こと林家こぶ平の父親、林家三平が「どうもすいません」とお茶の間にお笑いを届けていた頃でもあります。

―― ミスター　ジャイアンツ ――

そしてあのミスターこと長嶋茂雄が立教大学から読売ジャイアンツに入団し、輝かしい第一歩を記したのも昭和33年２月16日のことです。長嶋は開幕戦で金田正一投手（国鉄）に４打席４三振という実に長嶋らしいしデビューを飾り、その年の９月19日の試合でホームランを打ちますが、一塁を踏み忘れて「幻のホームラン」を記録し、その後の「長嶋茂雄」というキャラクターを暗示させています。それ以降の活躍はご存じの通りです。

ちなみに昭和33年という年は、野球の神様：川上哲治が現役を引退し、現巨人軍監督に復帰した原辰徳が生まれています。

―― チキンラーメン ――

「すぐおいしい、すごくおいしい」というＣＭが今もやっていて、世界初のインスタントラーメンとして歴史に残る、あの「即席チキンラーメン」が生まれたのは昭和33年８月25日のことです。スープが麺にたっぷりしみこんでいるから、お湯をかけて麺がもどるとスープの味もしみ出てきて、そのままおいしく食べられる。最初の頃は「魔法のラーメン」と呼ばれたそうです。

―― 東京タワー ――

東京のシンボル、東京タワーも昭和33年の完成です。地上333Ｍ。施工からわずか15カ月という驚異的な突貫工事の末に完成したのが12月23日でした。地震、台風の脅威にさらされる東京に造られた鉄塔は、あのエッフェル塔よりも高いのだということで当時、世界各国に衝撃を与えたそうです。

―― フラフープ大流行 ――

この年に大流行したおもちゃといえば、フラフープです。もとはオーストラリアの子どもたちの遊びにヒントを得てアメリカのおもちゃ会社が作って、この夏ニューヨークで大当たりし、日本では10月18日に270円で発売され爆発的ブームになりました。ピーク時には2秒に1本が売れたというからそのすごさが理解できるかと思います。そして「やりすぎると腸捻転になる」といううわさが出たこともあり、約2カ月で急に下火になりました。ただ今でも売っていて私の家にもあり、小学生の娘はフラフープがとても上手です。

―― スーパーカブ ――

本田技研工業から8月に発売されたスーパーカブは100ccで最高速度70km、車体はボロボロになってもまだ動くという丈夫ひとすじのオートバイです。ご存知の通り、スーパーカブは今なお現役で、基本設計、スタイルもそのままで、アジアの国々ではコピー品が多数で回って本家をしのぐほどの人気商品です。

―― スバル360 ――

この年、昭和33年3月3日に、富士重工業からスバル360、通称「てんとう虫」が発売されました。当時の価格で425,000円は庶民にも手の届く価格設定だそうで、スバル360が日本初の大衆国民車と言われています。曲線を多用したユニークな形状、住居性を重視した室内空間、軽自動車の手軽さなどが当時受けたそうです。

360ccのエンジンで4人の大人が乗っても最高時速は80km／h以上に達したというからすごいものです。スバル360は私が物心ついた昭和40年頃の我が家の愛車で、家族4人でドライブに出かけ、坂の途中でガス欠になり、確か後部座席のあたりにあったリザーブタンクのコックをひねるとまた動き出し、妙に感動したのを覚えています。

この車は今や昭和30年代のシンボルみたいなもので、ダイハツ・ミゼットと並んで昭和レトロ系の博物館やテーマパークには必須アイテムとなっています。

―― 一万円札の登場 ――

今はもう主役の座から降りてしまいましたが、聖徳太子の一万円札も昭和33年12月1日の登場です。この年の高度経済成長を象徴するかのように一万円札が登場し、「万札」という言葉はこの時から言われるようになったそうです。そして登場から26年後の昭和59年に、「万札」の顔は聖徳太子から現在の福沢諭吉に変わったのでした。

そのほかに昭和33年に登場した新商品・ヒット商品で今でも記憶に残っている物を羅列すると、野球盤［エポック社］、ファンタ（オレンジ・グレープ）［東京コカコーラボトリング］、果汁飲料プラッシー［武田薬品］、粉末ジュースの素［渡辺製菓］、テトラパック牛乳［協同乳業］、森永カクテルチョコレート［森永製菓］、冷蔵庫用脱臭剤　キムコ［アメリカンドラッグコーポレーション］、ビクトロン［日本ビクター］（日本初の電子オルガン）、キューピーフレンチドレッシング［キューピー］（日本初の市販ドレッシング）、アーモンドチョコレート［グリコ］そしてわが国初の缶ビール［アサヒビール］も登場しました。

その他、どんなことがあったかといえば、創刊された週刊誌、女性自身［光文社］、週刊明星［集英社］、週刊大衆［双葉社］、週刊実話［実話出版］、週刊ベースボール［ベースボールマガジン社］など今も残っている雑誌が創刊され、創刊ラッシュの年だったようです。企業ではイトーヨーカ堂、丸大食品、全日空が創業。東京通信工業が社名を現在のソニーに変更し江崎玲於奈が、画期的な半導体「エサキダイオード」の理論を発表したのがこの年ですが、日本ではほとんど注目されず、海外で絶賛を浴びたとのこと（この風潮は今も変わりませんが、江崎玲於奈博士は1973年にノーベル賞を受賞しました）。

アメリカでは政府機関としてＮＡＳＡが発足。初の人工衛星「エクスプローラ1号」の打ち上げに成功している。世界初の海底トンネル「関門トンネル」が開通（全長3,461m、着工以来21年）。チューイングガムやタバコの自動販売機が登場し、東京の公衆電話（東京以外はその後）に110番、119番が取り付けられたのも昭和33年です。

こうやって見ていくと約半世紀の時が流れ、今

はもう廃れてしまったものもありますが、21世紀の今の時代にも残っているものも多く、昭和33年という年を少し実感できたような気がします。

次の干支が回ってくる12年後には、今あるものはまだ残っているのかな？　そんなことを考えながら年をとりたくはないと思いつつも、少し楽しみにしている自分がいます。

がんばれヤンキース

札幌市医師会
ともこレディースクリニック　佐藤　智子

ヤンキースとは言っても、あの松井選手のニューヨークヤンキースのことではなく、息子の所属するリトルシニアチームのお話です。

３年前、息子が小学５年生の春、突然少年野球チームに入ると言い出しました。スイミングスクールは、初日に「人に教わるのはいや」と、止めてしまった子です。私自身は小学校に入る前から大のプロ野球ファンで、受験勉強中もテレビの野球中継だけは見逃さなかったほど。息子が野球に興味を示してくれるのはとてもうれしいけれど…今度もいつまで続くやら。

ふたを開けてみると、５時に起きて朝練もいやがらず、何があっても野球優先。土、日、祝日全て練習、試合で､「野球をしているときが一番楽しい」そうです。お陰で母は仕事のない日、全ての時間を息子の野球に捧げる生活。でも、札幌ドームでの決勝戦（残念ながら負けましたが）というご褒美もいただき、努力が報われたと息子に感謝の気持ちも湧きました。

さて、中学は当然部活に入り、やっと私の休日が戻ってくるものと決め込んでいたのに、リトルシニアのクラブチームに入りたいと言い出す始末。硬式なので、少年野球のように近くの公園で練習、試合「自転車で先に行っててね」というわけにはいかず、石狩新港の専用グラウンドまで送迎要。監督、コーチはボランティアのため、母は毎回手作りお弁当でおもてなし要（弁当作り、お茶出しの当番あり）。球団は全道に30数チームあり公式戦は泊りがけの遠征になることも多いのです。

仕事と野球で日々が過ぎていきます。同じように仕事を持っている母達は思うように掃除もできない、買い物は駆け足で必要最低限のもののみ、考えてみたら最後にゆっくりデパートで買い物をしたのはいつのことだったかなー？

でも「全てはかわいい息子のため」こんな母の思いに応えて、さぞかし立派な成績を残してくれるかと思いきや、勝てないのです。来る日も来る日も負け。今年は公式戦（リーグ戦で）冷や冷やの１勝のみ。トーナメントは全て初戦敗退。祝勝会は２勝目をあげてからと、おあずけ状態。もっと勝てると思ったのに。同じ中学生じゃないか。

確かに団員が少ない。全部で23人。他の強豪チームは総数100名以上、１学年30人以上もいて、３年間１度も試合に出られない子もいるそうな。スタンドではベンチ入りできなかった子が声変わり前後の混声合唱で応援。

こちらは、いつも全員ベンチ入り、その分（３年生が修学旅行の時）１年生から公式戦に出られるチャンスもあったでしょ、試合経験は豊富のはず？少人数でも甲子園で活躍したさわやかイレブンの池田高校（かなり古い話）みたいな例もあるじゃないか！

今年こそは祝勝会を開こうよ！がんばれ、がんばれヤンキース！

ヨーロッパ眼科学会
―ベルリンへの旅

札幌市医師会
市立札幌病院　今泉　寛子

昨年秋にベルリンで開催されたヨーロッパ眼科学会に出席しました。ヨーロッパ眼科学会は２年に１回、ヨーロッパ各地で開催されている学会で今回が第15回、ドイツ眼科学会との共催で開かれました。発表のポスターを大事に持ち、前泊した成田で成田山に安全祈願のお参りをし、万全の準備で秋も深まった９月24日に一行６人でベルリンに到着しました。25日には野口みづきさんが優勝したベルリンマラソンが行われていました。

海外の学会の参加は今回で５回目、学術的なことは日本の学会とは大きな差はないようでしたが、ちょっと印象に残った日本の（私の知っている）学会との違いを書きたいと思います。

１）ポスターの作り方。いつも発表スペースにあわせてＡ４などの用紙を縦○枚、横○枚　合計○枚として作っていました。初日にポスターを貼りに行って両面テープが数十枚必要と言ったところ受付嬢に驚かれ、これ以上はあげないといわれました。テープまで節約しなくても良いのに、と思いましたが、ヨーロッパの人たちは皆、１枚の大きな用紙で作成していて、テープは５、６枚しか必要なかったのでした。テープを節約していたのではなく、ポスターのつくり方が違うのだと納得しました。なお翌日貼りにいった人にはセロハンテープが用意されていました（おそらく日本人用に）。

２）言葉。学会の要項には言語は英語と書かれていたにもかかわらず、ドイツ語で講演している人や、ポスターセッションではドイツ語で作成されたものもあり、ローカル色は良かったのですが、ちょっとビックリもしました。

３）会場入口の警備員。ドイツは治安の良い国だそうですが、会場入り口にはとても体格の良い強面の男性が目を光らせていました。出入口は狭く、ＩＤカードで厳しくチェックされ、日本のほとんどノーチェックの学会とは違う雰囲気でした。もちろん会場内は和やかでしたが。

学会参加の意義（？）にはその土地の風物を訪ねることと地元の味を楽しむこともあげられます。ベルリンの街は石造りの重厚な建物が立ち並び､「ベルリンの壁」の跡には長い複雑な歴史がうかがえました。数多くの博物館や美術館（一つ一つがとても大きくて、見るのに時間と体力が必要)、コンサートホール（超有名なのがキタラのお手本になったベルリンフィル）などがあって非常に文化的、ベルリーナはとてもフレンドリーでした。ビールもソーセージも評判通りにおいしく、実質５日間のベルリン滞在はあっという間に過ぎてしまいました。数年後にはベルリンで国際眼科学会が開かれるとのこと、是非再訪したいと思いながらベルリンを後にしました。

図１　学会ポスター会場にて。
左からドイツ人眼科医、宮部靖子先生（萬田記念病院眼科)、私、木下貴正先生（当科)。

図２　歩道に埋設されたベルリンの壁跡地のプレート。

新　春　随　想

戌、犬、イヌ

札幌市医師会
耳鼻咽喉科麻生病院　原田　幸二

自分が戌年であることは随分小さいころから意識していた。それも肯定的な意味合いである。日本人はネコ好きよりイヌ好きのほうがやや優勢だ。古来、犬は安産のシンボルであったり、忠犬ハチ公、南極物語などよいイメージが強い。一方猫は、化け猫などと妖怪にも登場する場合もある動物だ。戌年の私も別にネコが嫌いというわけではない。よりイヌに親近感があるだけだ。コンパニオンアニマルというような言葉が一般化する以前から、日本人にとってイヌは家族的な身近な動物であった。今年で48歳になるわけだが、そのうち40年以上はイヌを飼いたいと考え続けてきた。残念ながら父親は公務員で転勤族だったので、幼時よりイヌを飼うという環境になかった。自分が医者になってからも研修であちこち移動するために、やはりイヌを飼うということはできなかった。そのうち子供も3人となったが、何かしら忘れ物をしている感覚は続いていた。

今の病院に勤務してからは自宅を持ち、やっとイヌを飼う物理的環境が整った。家を設計する段階で、布石は打っておいた。居間に三角の突出部を作ったのだ。1㎡足らずだが、そこだけフロアはタイル張りとした。妻は、園芸の鉢植えを置くスペースだと思ったらしい。私は室内犬のハウスを置くことを念頭においていた。それともうひとつ。ウッドデッキも少し広めに作っておいた。妻はバーベキュースペースと思っていた。私は室外犬ならここで飼おうと考えていた。イヌを飼うということは、私にとっては40年来の規定路線とも言えるが、家族にとってはあまりにも唐突だ。自分だけで毎日散歩に連れて行けるとは限らない。出張で不在な時だってある。犬を飼うにあたって、家族の協力は必須なのだ。家を建てたからといってすぐ犬を飼えるわけではない。

それでも地道な懐柔策を積み重ねていった。あるとき近所に巨大なホームセンターができた。広い動物コーナーもできたために、休みになると下の子2人をよく連れて見に行くようになった。犬の本を1冊、2冊と買ってきては居間のテーブルに置いておいた。いつの間にか、その数は20冊以上にもなっていた。次女の夏休みの自由研究には犬のことを調べさせた。お陰で犬種も100種類くらい覚えてしまった。家族の話題も犬のことが自然に多くなり、飼うのだったらどんな犬種がよいか、という話に妻が口を挟むまで成長（？）していたのだった。しかしながら、いざ飼うとなると自分の負担が格段に大きいと確信していた妻の牙城は、容易には崩れなかった。

転機は突然訪れた。検診で子宮頸癌の可能性を指摘された妻は、子供たちの夏休みに子宮頚部円錐切除術を受けたのだ。初期の癌とはわかっていても、妻の不安は大きかったようだ。同僚の妻が、数年前に消化器の癌で他界していることもあった。大学病院での手術は、婦人科・麻酔科医の尽力で、何のトラブルもなく、苦痛も最小限で終えることができた。夏休みも終わり、安心はしたが反面気が弱くなっていた妻と次女を連れて、いつものホームセンターに出かけた時のことだった。小奇麗なケージには、その日きたばかりの生後2カ月のウェルシュコーギーのメスがいた。彼女と次女の目が合った瞬間、運命は決まっていた。その日からうちの家族が増えた。

ぷりんと名付けられた彼女は、一番冷静だった長女の心の中にも入り込んですぐに根付いた。今では妻も毎日のようにドッグランでアジリティに熱中している。そして今年は戌年。家族の輪の中心になった犬「ぷりん」…。

ところで古来中国では干支の中の最後の3つ、酉（鶏）、戌（狗）、猪のイメージはあまりよくないらしい。戌の日の腹帯なんて、とんでもないことのようだ。そんなところにも日中の温度差があ

るのかもしれない。しかし中国でも最近はペットブームとか。時は流れる……日中関係も何とかなりませんかねぇ。40年来の念願を果たしてそんなことを想う今日この頃…。

早寝、早起き、腹八分目、そして禁煙

函館市医師会
函館新都市病院　青野　允

今年まもなく6回目の戌年の誕生日を迎える、昭和最後の一桁生まれ。物心ついた時には、世の中は大東亜戦争に突入していた。幸い生まれ育った余市では、偵察機から爆弾が2発投下されただけですんだ。勿論、食べるものはなく、主食は魚と菜っ葉であった。小学校6年生のとき、体重がやっと8貫目になって嬉しかった。

また当時の平均余命は50歳ちょっとで、自分は兵隊さんにとられて、戦死すると思って、ひそかに泣いていたこともあった。

ところが、運よく戦争は終わり、中学に入ったが、世の中、食糧不足で、雑炊や代用食は固形の弁当には出来ず、授業は昼で終わったという時代であった。

その後60年余り平和の時代が続いているが、その間に、一気に欧米風の食事や生活習慣に侵略されて、メタボリックシンドロームとかいう、かっこよい診断名が付いた病態が蔓延している。新年早々こんな話もはばかられるが、太古から日本人はいつも飢餓に悩んできたので、節約因子が発達したそうで、そのため、少しでも多く食べると、容易に肥満になりやすいらしい。昨年は、BMIが25%以上の国民が3割を超えている。その結果、最近急速にAEDなるものがあちこちに配備されており、新聞紙上にもしばしば登場する。当院にも備え付けているが、幸い実地で効果を試していない。

このAEDも忌々しい存在である。私の短絡思考の中では、欧米風の高カロリー食→肥満→運動不足→心筋梗塞→心室細動→AEDとなる。このAEDがつい最近まで欧米製が主流であった。要するに、節約因子をもつ日本人をブロイラー状態にしておいて、心室細動を起こさせて、AEDを売り込むという妄想に憑りつかれている。

肥満は3割を超えたが、逆に喫煙率は3割を切ったという。しかし、本道はダントツで喫煙率は高い。喫煙者に厳しい世の中になっても、強い意思の元に喫煙しているのを目撃する。厚労省もついに重い腰を上げて、麻薬同様にニコチン依存症と認定して4月から保険給付をするらしい。頭の痛い先生方もおられると思うが、こうなると、原因である喫煙と治療のニコチン代替療法を同時に医療施設で行うことは理屈に合わない。麻薬同様にタバコ、喫煙ともに違法になるかもしれない。小泉内閣はすでに、ひそかに法務省に通達済みという不確実かつ未確認情報を入手している。

アメリカではタバコ会社が訴訟の対象になった。彼らの次の有望なマーケットはアジアであり、日本だ。マイルド！スパーマイルド！などと、イメージ戦略を繰り広げ、若年層が狙われている。それでも、お人良しの日本はタバコ税を数パーセントだけ上げようなどと生ぬるい。どうせならワイルド！超ワイルド！などと銘打って、一度吸ったら、それだけで十分失神するほどの高級ブランド品を作る。1箱最低3,210円くらいにする。5,000円と言いたいところだが、そうすると“売人”や“密輸”が横行しそうなので、この辺で手を打ちたい。もちろんタバコ税は80%程度にする。こうすると、世の中きれいになり、税収も変わらず、メタボリックシンドロームも少なくなる。

そうすると、われわれ高齢者の医療費に向けられる目も少しはマイルドになるかもしれない。それでは、今年もよろしくお願いいたします。

新年早々失礼します。

留萌医師会
留萌市立病院　川田　佳克

私は留萌市立病院で脳神経外科の勤務医をしております。医師会の方から年男、年女の中から無作為に選ばれたとの知らせがあり、原稿を書かせていただくことになりました。昭和33年の戌年生まれで、今年の誕生日で48歳になります。今まで全く自覚していなかった訳ではありませんが、4回り目の年男であることを指摘されると、改めて自分もりっぱなオッサンになってしまったものだと感慨に耽っております。ついでに同じ年男、年女の有名人にどんな方々がいらっしゃるのか調べてみました。巨人の原辰徳監督、歌手の玉置浩二、かつての中三トリオ、マイケル・ジャクソンなどが同じ年齢であることは知っておりました。ネットで調べてみると、マドンナやシャロン・ストーンも同じ歳、またスケートのエリク・ハイデンやマラソンのロサ・モタも同じ年齢だったと判明し、ちょっと意外な気がしました。

それはさておき、書き物は苦手なので趣味のことでも書きましょうか。私は科学ものの本を読むのが趣味の一つです。変なヤツだとお思いになるでしょうが、「光の速度が秒速30万キロメートルと有限である」ことの意味が昔からずっと気になっています。誰もその答えを出してくれません。ところが最近の相対論の世界では、これまで絶対的な存在であった光の速度が、実は経時的に変化しているのではないかという説が出始めております。そこに何らかの意味が見出せないかと胸ときめかせており、優秀な研究者達に何とか結論を導いてもらいたいと切望してしいるのですが、まだ真相は闇の中。ですがこれからが面白い、などと普段暇さえあればこんなことばかり考えています。

相対論はいわば大きな観点から、小さなものに向かって物事を理解して行こうという姿勢ですが、その対局に、素粒子などの小さなものから理論を構築し、大局的なものを理解する方向に向かう量子論というものがあります。ハイゼンベルグの不確定性原理に代表される、観測不能の領域です。また超弦理論だの多重宇宙だの、ハリウッドのSF映画の題材に事欠かない不思議な世界も提供しております。ところが両研究者は水と油で、光の速度の呪縛を破れない相対論と、根本的なところでサイコロ遊びをしている量子論（byアインシュタイン）は、目指すところは一緒なのですがそれぞれ頭が硬く、切り換えて殻を破らない限り意見の一致などあり得ない世界のようです。

私自身も40を過ぎると急速に対応能力が低下して頭がどんどん硬くなっているのに気付きます。ホーキングの言う虚時間がどうしたこうしたと考えていても、これ自体が私にとって虚ろで無駄な時間なのかもしれません。医学論文の一つでも読んでいた方がよっぽど有意義かもしれません。ただ全く別の分野の話も多少は囓って、少しでも頭を柔らかくしたり、視野を広げておくことも大事、なるべくいろいろな好奇心を持ち続けようと考えています。

何でもそうだと思いますが、狭い視野の中ではどんどんおかしな方向に考えが進む場合があります。先日、国の省庁の某局長の講演を聴く機会がありました。曰く「臨床研修医制度を作ってから、医師の都市集中を懸念する声があるが、実際は地方にどんどん医師がちらばっており、むしろ都市偏在は解消されてきている」。唖然と聞いておりましたが、何かおかしくないでしょうか？北海道には当てはまるのでしょうか？今後の医療行政も、おかしな方向にどんどん話が進まないことを祈るばかりです。

年金の話

札幌市医師会
大月皮膚科医院　大月　國司

新年明けましておめでとうございます。

今年の年男ということで、道医報の“新春随想”の原稿執筆の依頼をうけました。年男…ということは今年還暦を迎えるということに…ということは長い間掛けていた年金の一部が受け取れることになります。

思い起してみると、大学を退職する時に、(当時は年金のことなど考えてみたこともなかったので）共済組合の掛け金を一時金で受け取ろうとしましたが制度が変わっていて一時金で受け取ることはできなくなっていました。その後、旭川赤十字病院に勤務した時に必然的に厚生年金に加入させられてしまいました。旭川赤十字病院を退職した時、このままにしておいたら今までの掛け金がすべて無駄になってしまうという姑息な考えで国民年金に加入しました。

私たちの年代では年金を受け取るためには国民年金、厚生年金、共済組合の加入期間の合計が25年以上必要です。今年からいったいどのくらいの額の年金を受け取れるのかと思い、社会保険事務所に電話をし、国民年金の加入期間に厚生年金の加入期間を加えても加入期間は24年にしかならないが共済組合に加入していた時期があり、その期間を加えると25年以上になる旨を電話で話し年金見込額を試算して欲しいと申し込んだところ“解かりました”とのことでした。間もなくして回答が郵送されてきましたが、その内容をみて驚いてしまいました。“年金を受け取るために必要な期間が不足しているため試算を行うことができませんでした”と書いてあるではありませんか。私が電話で話した事は一体どうなってしまったのか。早速、社会保険事務所に電話をかけ、文句を言ったところ、年金手帳と共済組合の加入期間を証明するものを持参して社会保険事務所の相談窓口に来て欲しいと言われてしまいました。

ゴルフのシーズンも終わり時間を持て余していたのでノコノコと社会保険事務所の相談窓口に出かけていきました。受付を済まして待つこと約30分やがて名前を呼ばれ窓口に案内されました。そこで係の人に年金手帳をみせ年金見込額について尋ねたら係の人がコンピューターに記号、番号等を打ち込みはじめました。やがて、“制度共通年金見込額照会回答票”という仰々しい名前の付いた紙切れが出てきました。それによると私の場合の年金見込額は厚生受発時(60歳)108,800円（この額は月額ではありません年額の話です。)定額部分受給時(63歳)149,800円、65歳時から601,700円となっていました。このくらいの額が長い間、国民年金を主に年金を掛けてきた場合の年金額なのです。とても生活できる額ではありません。国会議員の議員年金を廃止しようとの意見が出た時にある議員が“国民年金だけでは…”と述べたのはもっともな思い（自分たちが作った制度だという視点が欠落しているが）かもしれません。

ねずみ講というのがあります。これは法律で禁止されています。代を重ねていくうちに親を支える子がいなくなりやがて破綻するのが明らかだからです。今の年金制度もこれに似ているような気がします。現役世代が制度を支えている限り、次の世代が増え続けていかなければなりません。次の世代の人口が無限に増え続けるということは考えられないのです。この生活できない、支えきれなくなる今の年金制度を何故、かたくなに守ろうとしているのでしょうか。一つの法律ができます。それにより一つの制度とそれを実行する組織が生まれます。そこから新たな利権が生じてきます。そのために本来その法律と制度が目的としたところから離れ始め、その利権と組織を維持することが目的となってしまうことが懸念されます。

臥牛の山は低くして

函館市医師会
函館赤十字血液センター　尾崎　鉄也

沖縄は2回目である。1回目は1993（昭和68）年。金城先生のお世話で札医大卒業35周年同期会が盛大に行われた。今回は2005年5月、JTBのパックで、石垣島2泊、本島2泊というスケジュールである。

今日は最終日で本島の南部観光である。那覇を出発しガイドさんが沖縄戦を説明している中に、ひめゆりの塔に着く。塔と呼ばれているが高さ2～3メートルの台形の慰霊碑で、その前に海軍第3壕が口を開けている。ここは野戦病院で敵が迫ってきたので退去命令が出たが連絡が届かず逃げ遅れ、中にいた96名中85名が死亡。ひめゆり学徒46名のうち生残ったのは、わずか5名に過ぎない。右横に医療関係者の慰霊碑があり、風雪を刻んでボロボロになっている。ひめゆり平和記念資料館には奇跡的に生き残った人々の手記があり、涙なくしては読めない。

バスは国立墓苑に廻る。各県の慰霊碑が林立している。北海道出身者が一番多かった故か、北霊の碑は縦5メートル横10メートルもあろうか、ひときわ大きく北海道地図がはめ込まれている。

話は変わるが40年程前だったか、道新函館市内版に次のような記事が載った。「…摩文仁の岡の慰霊碑で『わが立てる　臥牛の山は低くして　南海は見えず　吾子はかへらず』と言う歌がはめ込まれたのがあるが、傷みが甚だしい…」。何日か経て「…これを読んだ市内の業者から、拓本があれば製作してあげたいと申し出があり新しい銘板がはめ込まれた…」。という記事が紙面を飾った。その碑は北霊の碑に向かって左手前の隅にひっそり立っていた。大きさはタタミ半畳ほどか、詳しいことはわからないが母親の悲痛な叫びがひしひしと胸を打つ。墓苑の周囲は森山良子の歌う一面の砂糖きび畑である。こうして平和の光の下に生きているということは、何と有難いことだろう（臥牛山ー函館山の別名）。

公式の統計によれば、沖縄戦における日米両軍

手前がその碑で奥が北霊の碑

ひめゆりの塔　手前が第3壕

新春随想

の戦没者数は約20万人で、日本軍戦死者の沖縄以外の出身者は6万6千人、米軍の戦死者数は1万2千人だった。そして残る12万2千人の沖縄出身者のうち、軍人軍属は2万8千人でそれを除く民間人の死亡者数は9万4千人に達していた。このほか、記録に残らない戦没者として、朝鮮人の労働者が約1万人いたとされている。また男子生徒からなる鉄血勤皇隊は1,780人のうちおよそ半数に当たる894人が戦場で若い命を落した。一方ひめゆり隊で代表される女子看護隊は583人のうち334人、つまり約57.3パーセントの女子学生が戦火の中で帰らぬ人となったのである。

文　献

1．これが沖縄戦だ　大田昌秀　那覇出版社　平成3．
2．八重山の戦争　大田静男　南山舎　1999
3．沖縄決戦　学習研究社　2005

シャイロックより悪いやつ

十勝医師会
広尾町国民健康保険病院　中村　隆志

ヴェニスの商人に出てくる世界的に有名な悪党、金貸しのユダヤ人シャイロックが好きである。他の登場人物が浮ついているのに比べ彼は真摯に生きており、私には、法廷の裁きが彼に過酷過ぎるように思われる（そもそも初めの契約は、両者の十分な合意の下になされたわけだし、法学博士を偽る女が判決を引っくり返すのはおかしい。「肉を切っても血を出すな」とは理不尽なことこの上ない）。

そもそも悪人といえども、終始悪を貫けるものではないし、悪意で行ったことが誤って（？）良い結果を生むこともあるだろう。

私は外科医で乳がん症例も手がけてきた。罪なき数多くの人において胸の肉を切り取り、おまけに一人につき1ポンドを超えることも多かったので、その点ではシャイロックより罪が重い。

外科医が執刀する場合、自分では満足できる完成度の手術をしたにもかかわらず、患者から責められることがよくある。一方、自分としては不満足な手術で感謝されることもある。何をもって善悪の判断をするかは大変難しい。

ところで、善意の人には、ひょっとすると悪人よりむしろ問題があるのではないだろうか。すべての点において良い行いをしようとするとどこかに無理が生じて、最低の結果をもたらすことがあるようだ。自分は悪いことをしたためしがない、と言える医師がいたならば、そのかなりは、自分の仕事の結果を正確に把握できていないだけだろうと思う。

コレステロールにも善玉、悪玉があるが、医者を分類するなら自分はいったいどちらに属するのだろう？少なくとも自分では、哲学のないのんきな善玉より真摯な悪玉が合っているような気がする。

若州一滴文庫

滝川市医師会
滝川市保健センター　武内　恵輔

「若州一滴文庫」は作家水上勉が1985年故郷の地に竹人形浄瑠璃の拠点として建設した。水上が63年「越前竹人形」を書いた後、竹人形作りを始め、息子の窪島誠一郎に再会したのが77年、画商の窪島は79年信州に「信濃デッサン館」を作ったので、これに水上が触発された節もある。

2004年「一滴文庫、くるま椅子劇場」に竹人形文楽を観に出かけた。JR小浜線若狭本郷駅からのどかな畑の中を歩いて30分、10軒ほどの集落に寄り添って竹やぶのなかにそれがある。水上作品によると大飯町岡田は昔電気もなく汁田で稲を作っていたという。今は原発誘致の恩恵なのか平和でのどかな田園風景が広がっている。「一滴文庫」は茶店ふうの休憩所、六角堂を中心に図書室、美術館のある本館、竹人形館、竹紙工房、茅葺館、くるま椅子劇場があっていわばカルチャーの複合施設だ。現在大飯町に寄贈され、管理はNPO法人が行っている。ここまで来た記念に出資したがその会員番号は意外に小さな数字だった。

本館には水上の故郷の少年たちに提供された2万冊の蔵書、ゴゼ絵の斉藤真一、水上作品の挿絵、装丁をした渡辺敦などの作品が並んだ美術館で、過去に紹介されたTVのビデオを見せてくれる。竹人形館には数十体の文楽竹人形が水上作品ごとに展示され独特の陰鬱な雰囲気を醸し出している。くるま椅子劇場は白壁の小学校風の造りで、客席は100人あまりで満員となりそうな板の間、座禅道場としても使用できる。くるま椅子劇場としたのは娘さんが障害をもっているためだろう。彼の作品に「くるま椅子の歌」もある。

若州人形座の公演は春秋2回ここで行われ、今回は近松原作の「曽根崎心中」。語りは1人、これがメインキャスト。三味線の代わりに篠笛、2人ずつの人形遣い、すこし現代的にアレンジした語りなので話が良くわかる。元禄、金に汚れた世間からはじきだされた手代徳兵衛と遊女お初が来世を信じて心中する。弱者のままで終わる2人の哀れさ、切なさが涙をさそう。曽根崎の森への道行きで、舞台の背景は建物の外に広がる竹やぶが開口部を通しホリゾントにほのかに浮かび出て素晴らしい効果を見せ、弱者の死出を美しく飾る。

2005年秋は岩内の劇団がここで上演の予定と知らされ、後でそれが「飢餓海峡」、演出は鈴木喜三夫と知ったが、若狭は遠くて気軽に出かける訳にはいかない（旧友鈴木は04年10月「北海道演劇1945－2000」を道新から出版）。この時の観客は京都ナンバーの車が多かったが、普段の日の来場は少なく数人のこともあるとのこと。

現在の若狭は遠かったが、昔は京都との交流が盛んだったらしく、小浜には奈良京都の有力な寺の寺領もあったという。水上が小学校5年で京都の寺に小僧に出されたのにも土地柄があったのだ。小浜、遠敷（おにゅう）、国道から5㎞ほどの山間に「神宮寺」がある。ここが奈良二月堂の若狭井のお水取りの源泉？だ。この寺の井戸から汲んだ水をたいまつ行列で遠敷川上流の「鵜の

新春随想

瀬」に流す「神事」が何百年も続いている。この寺の今の奥さんはアメリカ人だというから複雑だ。現代の日本の都市化、近代化の風潮のなかで、官でも企業でもない人の暮らしや祈りはどこにいくのか、「一滴文庫」や「神宮寺」の予後について考えてみたが、竹やぶで先が見えない。

エレガントな死について

帯広市医師会
帯広協会病院　高橋　徹

昨年6月に父が亡くなり新年の挨拶を遠慮しておりましたので、北海道医報からの原稿依頼をどうするべきか迷いました。しかし、多くの年男の中から選ばれるという偶然は何かの縁と思い父のことについて書くことにしました。

私はいわゆる総合病院で外来のみの精神科医として働いています。内科や外科などいわゆる身体科の技術の進歩に驚かされる毎日ですが、必ずしもそれが患者さんの幸せとは一致しないということにも行き当たります。特に老人医療、とりわけその看取りの場面でその思いは強くなります。

父は「尊厳死を希望する、不必要な延命治療は希望しない」と宣言し、文書も残していました。不必要な延命治療とは何かが難しいことなのですが、とりあえずその意志は汲みたいと考えていました。痴呆（認知症）が始まり身体的にも衰える中で、父は家から離れたくない・入院はしなくてよいと言います。積極的に治療すべき疾病もなく入院に拒否が強いので、在宅での看取りを決めました。母の苦労は大きかったと思いますが、主治医の先生に往診していただき、様々なスタッフの援助もあり、父の希望通りの逝き方ができたのではないかと思います。

これで良かったのか？母は悩むのだそうです、もっと長生きをさせられたのではと。確かに長生きをさせられたでしょう、まだまだ方法があることは私も医者の端くれですから分かっています。でも抑制をしてでも栄養補給をすることを父は望まなかっただろうし、何よりも自宅で母と一緒に居ることが幸せだったと思います。

ある本の孫引きできちんと調べていませんが、アインシュタインは死ぬ間際に運ばれた病院で治療をしようとする医師に「私は望む時に逝きたい。生命を人工的に長引かせることは退屈だ。私の役割はやり遂げた。今が逝く時だ。私はエレガントに逝く。」と言い、まもなく亡くなったそうです。アインシュタインだから許されたことかもしれません。しかし、こうした重装備ではない軽装の死・看取りもあって良いのではないでしょうか。

厚生労働省は在宅での看取りを増やしていこうと考えています。経済的な理由により経済的な誘導が行われていくと予想されます。患者の切り捨てに繋がるという批判もあるでしょう。しかし、食べられなくなれば中心静脈栄養・鼻からの経管栄養・胃瘻作製といった対応は医療提供者にとってはスタンダードですが、医療利用者にとっては必ずしも望まれている対応ではないように思います。

クォリティオブライフ（人生の質）の尊重として病院でもホスピスに準ずる看取りを許容していく・さらに在宅での看取りを進めていくならば、厚労省の方針も酷薄な施策ではなくなるでしょう。

父の死に際してもう一つ驚くことがありました。親にもらった名前で十分と戒名（法名）を断っていたそうです。菩提寺の住職は父の意志を尊重し俗名を読み替えて対応してくれました。良いことか悪いことか私には分かりませんが、これも父のリヴィング・ウィルだったと思います。

新年にはふさわしくない話題でしたが、内容共々亡き父に免じご容赦下さい。

最北の地にて

宗谷医師会
市立稚内病院　佐藤　祐一

稚内に来て2年の月日が流れようとしています。現在、市立稚内病院の産婦人科に勤務しています。宗谷地区の総面積は40万キロ平方メートルと長崎県とほぼ同じで、総人口は約8万人です。今、全国で産婦人科医減少により分娩取り扱い病院が減少していますが、この地域で個人医院を含め分娩を取り扱っている病院は当院しかありません。そのため、外来、分娩が集中して大変忙しく、外来は多い時で日70～80人、分娩は年450～500件程です。また、稚内は外国人妊婦も多いのが特徴で、中国人が最も多くロシア人、タイ人、フィリピン人、ルーマニア人もいました。会話は通訳がいる時は大丈夫ですが、いない時は筆談や下手な英語と、身振りで何とかコミュニケーションをとっています。先日は、ロシア人妊婦が37週で破水して初診飛び込みでやってきました。生まれた赤ちゃん達の中に金髪の赤ちゃんがいる光景は最初異様に感じましたが、最近当り前のようになってきました。慣れてきた自分が怖く感じます。

休日、旭川に出て稚内に帰る時はとても憂鬱な気分になります。名寄を過ぎてから稚内までの180km、大きな街もなく、稚内が陸の孤島であるということを再認識させられます。それは、病院で働いている時も同じです。妊婦さんの中に、切迫早産の子宮抑制剤コントロール不良や前期破水などで母体搬送をしなくてはならない時、旭川までの3～4時間が非常に長く感じ、救急車の中で状態が悪化しないか不安になります。無事搬送しても帰路がまた長く感じます。1日の三分の一を救急車で過ごすわけだから納得します。

私生活の面でも稚内に来て大きく変化しました。昨年の冬に長男が誕生しました。流産後にできた子だけに無事に生まれてくるまで気が気でなかったです。帝王切開分娩の予定でありましたが、自分で執刀するのは異様に怖く感じたので妻を里帰りさせて分娩させました。親になった瞬間は何も感じませんでしたが、これは職業病のせいかと思いました。翌日になってじわじわと実感が湧いてきました。かわいいという気持ちはあるのだが、親としての責任感も感じ言葉では表現できない気持ちになりました。これ以降、出産したばかりの妊婦と夫の気持ちが理解できるようになったと思います。以前は分かっているつもりでしたが、ちっとも理解してはいなかったと思います。以降、妊婦に対する接し方も少し変わった気がします。

2006年を迎え、地方の病院事情は産婦人科を含め他の医局も撤退傾向にあり、厳しくなってきています。残った医者が間接的に影響を受け負担が重くなっていきます。地方の人達は十分な医療を受けられなくなり、疾患によっては大都市に出なければならなくなります。また、医療側は保身的な態度を患者にみせていく傾向になり、その結果不信感を生むことになり悪循環に落ちていくことも経験しています。医療側と患者側の溝は深まるばかりであろうと思います。

当院では脳外科が撤退し、麻酔科が常勤でなくなりました。今年の目標は医療事故を起こさないようにすることです。当り前のことですが、当り前でなくなる気がします。この分娩がうまくいっても次の分娩がうまくいくとは限らず、帝王切開術も同様です。そういう怖さが危機感を感じながら経験を積むうちに芽生えてきました。

医療側も患者側も安心できる体制になるよう、国が早く動いてくれることを切実に望みます。